第3章

家族のかかわり

高岡 純子

第1節

父親の家事・育児へのかかわり

5年間で父親の家事・育児にかかわる頻度は増加している。立ち会い出産の比率は2011年で約6割である。子どもが父親と過ごす楽しい時間を持てていると評価する妻は、7割を超えている。

立ち会い出産

夫の立ち会い出産について、2006年と2011年の変化をみてみよう(**図3－1－1**)。立ち会い出産をした割合（「した」「したくなかったけれどした」の合計）は、2006年では54.1％で、2011年は8.9ポイント増加して63.0％になった。2011年の回答の内訳をみると、立ち会い出産を「した」60.9％、「したかったけれどできなかった」25.2％、「したくなかったけれどした」2.1％、「しようと思わなかったし、しなかった」11.7％であった。

父親の家事・育児

父親の家事・育児へのかかわりについて、2011年の数値を頻度の高い順に並べたものが**図3－1－2**である。全7項目のうち、上位4項目は育児に関するもので、ついで家事項目が続いている。もっとも頻度が高いのは「○○ちゃんと遊ぶ」で、約半数の父親が「ほとんど毎日する」と回答した。ついで多いのは「○○ちゃんのおむつ替え・トイレ」で、週3回以上が6割弱（58.2％）であった。週末だけでなく平日もおむつ替え・トイレにかかわっている様子がうかがえる。「○○ちゃんがぐずったとき、落ち着かせる」といったややかかわりが難しい項目では、週3回以上で5割弱（47.3％）となっている。同様に「○○ちゃんを寝かしつける」もやや難しい育児として想定したが、約3割（30.7％）の父親が週3回以上かかわっており、そのうち「ほとんど毎日する」父親は13.5％である。

父親の家事・育児へのかかわりは、5年間でどのように変化したのだろうか。5年前との比較が**図3－1－3**である。ほとんどの項目でかかわる頻度は増加している。「○○ちゃんがぐずったとき、落ち着かせる」14.9ポイントを筆頭に、以下「○○ちゃんを寝かしつける」8.3ポイント、「○○ちゃんのおむつ替え・トイレ」7.3ポイント、「炊事（食事の用意・片付け）」6.8ポイントの差となっている。これらのことから、父親が以前よりも積極的に育児に参加している様子がうかがえる。この背景には、政府や企業によってさまざまな子育て支援施策や環境が整備されつつあり、父親の子育てが注目されたり、共働き家庭が増加しているといったことなどがあげられる。どのような父親が家事・育児に積極的に参加しているのかについて、次ページ以降で職場環境、家庭環境の順にみていきたい。

図３－１－１　立ち会い出産（経年比較） 育児期夫

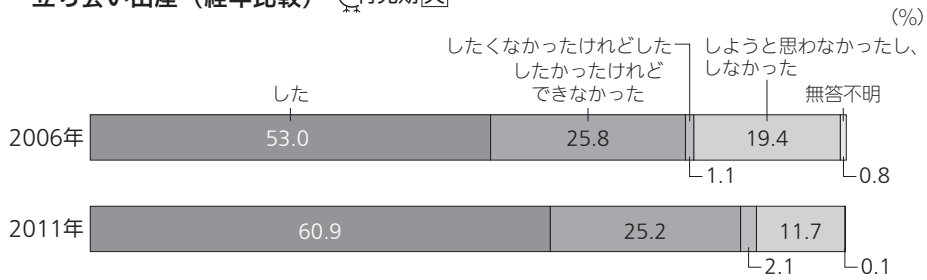


図３－１－２　父親の家事・育児頻度（2011年） 育児期夫

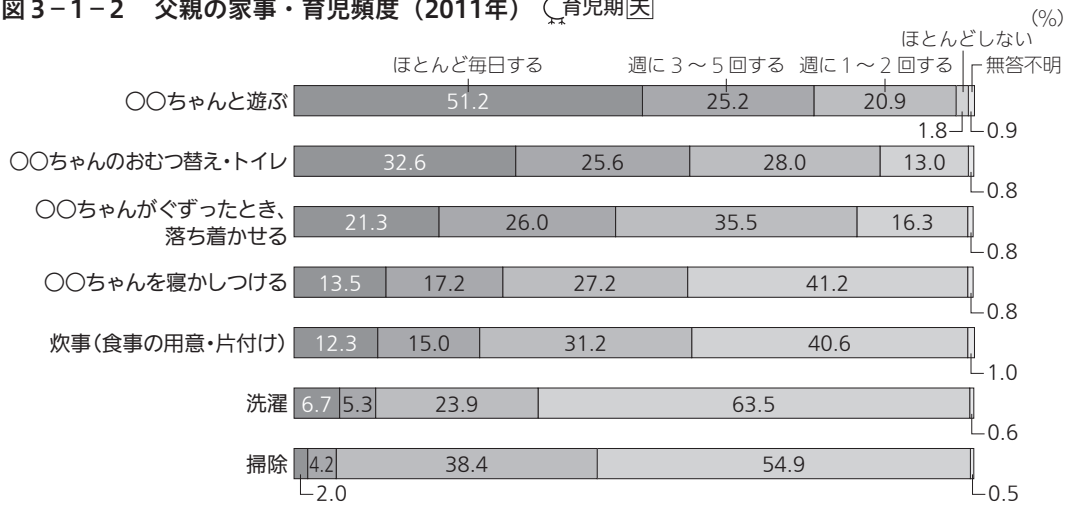
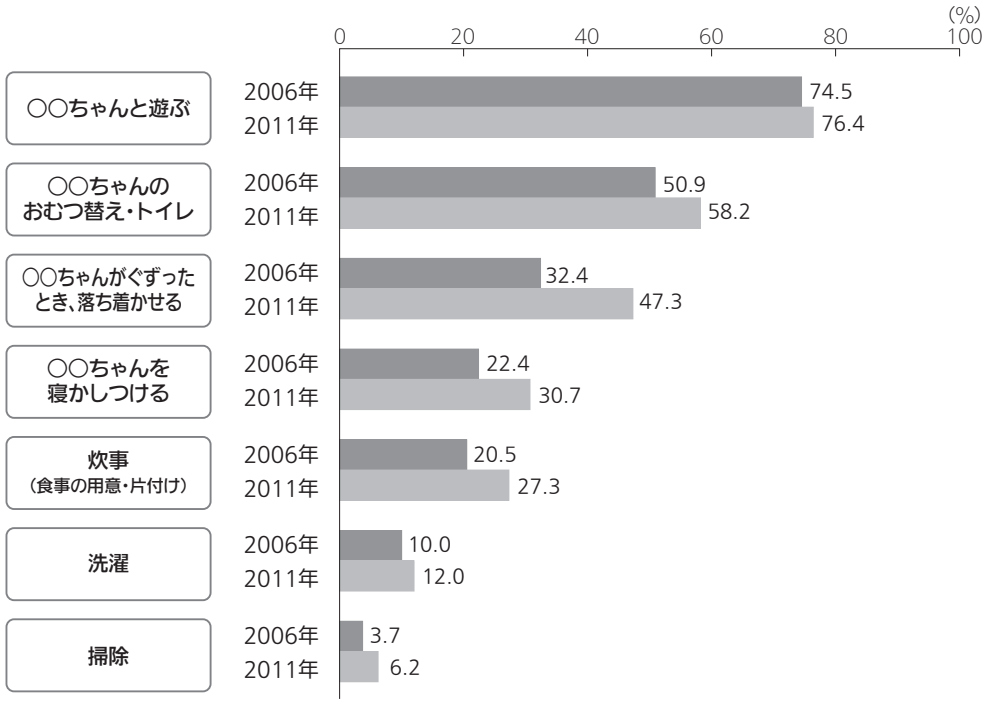


図３－１－３　父親の家事・育児頻度（経年比較） 育児期夫



注）「ほとんど毎日する」＋「週に３～５回する」の％。

父親のワークライフバランス

まず、父親の仕事との関係をみてみよう。

図３－１－４は、１日の実働時間を2006年と2011年とで比較したものである。１日9時間台以上で微減し、8時間台が増加している。全体としては、労働時間は若干短くなっているものの、2011年でみると、１日11時間台以上の割合は30.4％で３人に１人となっている。

１日の平均実働時間と育児への頻度

表３－１－１は、１日の平均実働時間と育児の頻度をみたものである。父親のかかわる育児頻度を得点化し、育児低群、中群、高群に分けている（以下、低群、中群、高群と表示）。１日の実働時間を11時間台未満と11時間台以上に分けて育児頻度との関係をみたところ、11時間台未満の父親は、低群で約６割、中群で約７割、高群で約８割を占めており、育児のかかわりが高くなるにつれて、11時間台未満の割合も高くなっている。実働時間が長くなると、帰宅時刻が遅くなることが考えられるが、乳幼児の場合、就寝時刻の平均は21時頃であるため（2010年「第４回幼児の生活アンケート」ベネッセ次世代育成研究所）、子どもの就寝後に帰宅する父親は、子育てへのかかわりが難しくなることも多いと思われる。

11時間台未満と11時間台以上による家事・育児へのかかわりの差

次に、１日の実働時間が11時間台未満の群と11時間台以上の群に分けて家事・育児項目との関係をみたものが**図３－１－５**である。全項目で、11時間台未満群のほうが家事・育児にかかわる頻度は高くなっている。とくに、育児に関する４項目では11時間台未満群と11時間台以上群の差が大きい。「○○ちゃんと遊ぶ」では11時間台未満群83.2％、11時間台以上群62.1％で21.1ポイント差、「○○ちゃんのおむつ替え・トイレ」11時間台未満群63.8％、11時間台以上群45.4％で18.4ポイント差、「○○ちゃんがぐずったとき落ち着かせる」11時間台未満群52.8％、11時間台以上群34.0％で18.8ポイント差であり、実働時間によって育児のかかわりには差がついている。一方、家事では、もともとかかわる頻度が低いため、育児ほど大きな差はみられない。

次に、実働時間の長さに関係していると思われる父親の職場環境の様子をみていきたい。

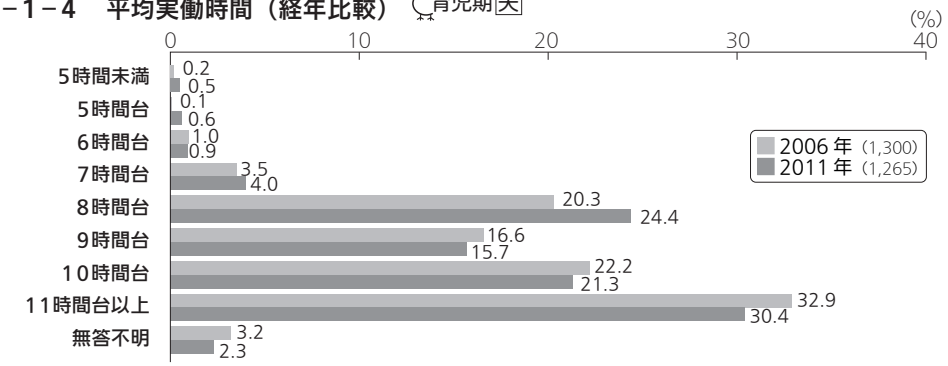
職場環境と家事・育児

職場の環境について聞いたものが**図３－１－６**である。「時間の融通のきく職場である」、「育児中の男性をサポートする雰囲気がある」、「遅くまで残業する人が多い職場である」など、男性が育児をしやすい企業風土があるかどうかについて聞いたものである。父親の育児頻度を得点化して３群に分け、各項目との関連をみた。

「時間の融通のきく職場である」、「育児中の男性をサポートする雰囲気がある」では、より時間に融通がきく職場であったり、育児中の男性がサポートされている雰囲気がある職場の父親のほうが育児に多くかかわっている傾向がみられた。また、「遅くまで残業する人が多い職場である」では、そのような傾向にない職場の父親のほうがより育児にかかわっている傾向であった。

具体的な育児項目でみてみると（**図３－１－７**）、「○○ちゃんと遊ぶ」の場合、時間の融通のきく職場である群（「まったくその通り」＋「まあその通り」）とない群（「あまりその通りではない」＋「まったくその通りで

図３－１－４　平均実働時間（経年比較）　育児期夫



注１）現在仕事をしている人のみ回答。　注２）（　　）内はサンプル数。

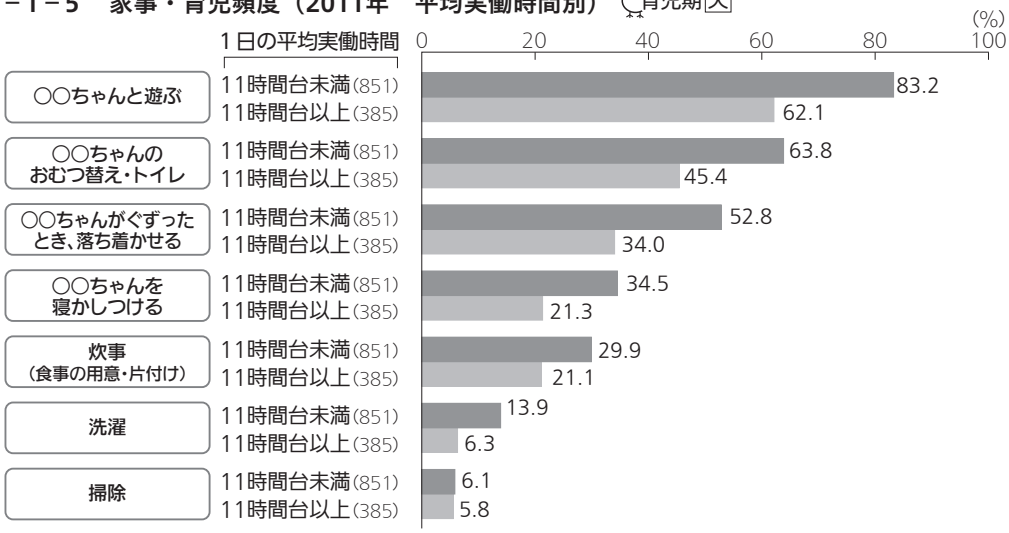
表３－１－１　1日の平均実働時間と育児頻度（2011年）　育児期夫

(%)

	11 時間台未満	11 時間台以上
低群（478）	57.3	42.7
中群（394）	70.8	29.2
高群（345）	82.6	17.4

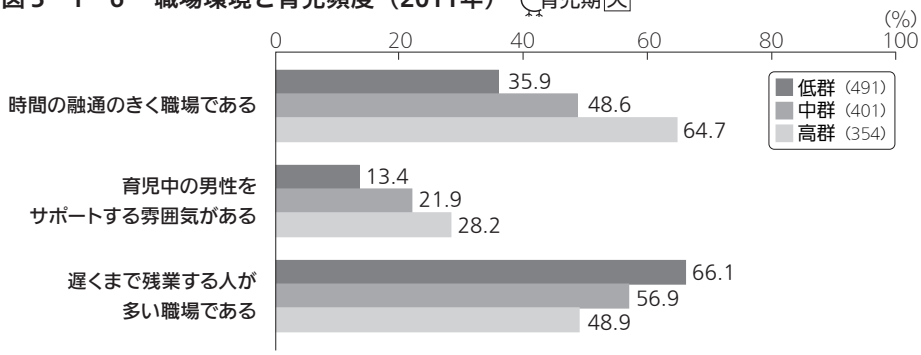
注１）現在仕事をしている人のみ回答。労働時間については、無答不明の人を除いて、分析。
注２）父親の育児頻度は、「育児の頻度」の質問４項目を得点化し、３区分した。１項目でも無答不明の人は除く。
注３）（　　）内はサンプル数。

図３－１－５　家事・育児頻度（2011年　平均実働時間別）　育児期夫



注１）現在仕事をしている人のみ分析。　注２）「週に３～５回する」＋「ほとんど毎日する」の%。　注３）（　　）内はサンプル数。

図３－１－６　職場環境と育児頻度（2011年）　育児期夫



注１）職場環境についての質問６項目中、３項目について「まったくその通り」＋「まあその通り」の%。
注２）現在仕事をしている人のみ回答。
注３）父親の育児頻度は、「育児頻度」の質問４項目を得点化し、３区分した。１項目でも無答不明の人は除く。
注４）（　　）内はサンプル数。

はない」）で比較すると、週３回以上かかわる割合は、時間の融通のきく職場である群84.9％、ない群68.6％で、16.3ポイントの差がみられた。同様に育児中の男性をサポートする雰囲気がある群では、週３回以上のかかわりは86.8％、ない群では73.7％で13.1ポイントの差、遅くまで残業する人が多い職場である群では69.3％、ない群では86.9％で17.6ポイントの差がみられた。これらのことから、育児をサポートする雰囲気や時間の融通がききやすいといった職場の風土が、父親の育児へのかかわりに関係していることがわかる。「第２回乳幼児の父親についての調査」（2009年、ベネッセ次世代育成研究所）では、育児休業制度を利用しない父親に対して、その理由を聞いているが、「職場に迷惑をかけるから」、「忙しくてとれそうもないから」、「前例がないから」といった理由が上位に並んでおり、職場に対する気遣いや気兼ねによって利用をためらう男性が多いことが示されている。

妻の就業有無とのかかわり

次に、妻の就業状況と夫の家事・育児へのかかわりをみてみよう。**図３－１－８**は、仕事をしている妻としていない妻に分けて夫の家事・育児へのかかわりをみたものである。

「○○ちゃんと遊ぶ」は、妻の就業の有無にかかわらず、週３回以上かかわる割合が高い。「○○ちゃんのおむつ替え・トイレ」（週３回以上、以下同）では、妻が仕事をしている群（以下、有職群）67.5％、仕事をしていない群（以下、無職・休職群）54.7％で12.8ポイントの差、「○○ちゃんがぐずったとき落ち着かせる」では、妻が有職群51.5％、無職・休職群44.8％で6.7ポイントの差、「炊事（食事の用意、片付け）」では、妻が有職群35.0％、無職・休職群24.4％で10.6ポイントの差、「洗濯」では、妻が有職群23.3％、無職・休職群8.4％で14.9ポイントの差であった。多くの項目で、妻が仕事をしている家庭の夫のほうが、家事・育児に参加する頻度が高い様子がうかがえる。

父親の育児頻度と子育てへの自信

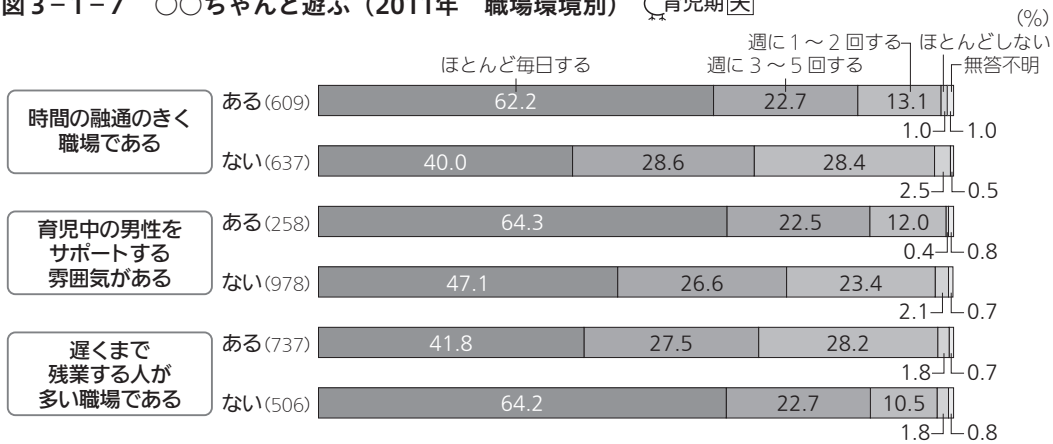
父親自身の子育て観に家事・育児へのかかわりはどのように影響をおよぼしているのだろうか。**図３－１－９**は、2011年の父親の育児頻度を高中低の３群に分けて子育てへの自信との関係をみたものである。「子育てに自信が持てるようになった」と肯定的に回答した人（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）は、高群では46.9％、低群では26.8％となっており、育児により多くかかわっている父親のほうが子育てに対する自信が高い傾向がみられる。2006年より４年間行った縦断調査の結果をみると、子どもの年齢が早い時期（0歳児）から父親が子育てにかかわるほど、子どもとの愛着関係が築かれ、父親自身の子育て肯定感の高さに影響するという結果がみられた（2010年「第１回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査報告書」ベネッセ次世代育成研究所）。親の子育て肯定感の高さは、子どもにとっての良質な環境に関連がみられるため、父親が早い時期から子育てにかかわることが大切である。

父親の育児に対する母親の評価

図３－１－10は、「○○ちゃんは父親と過ごす楽しい時間を持てている」という、母親の側からみた評価を2006年と2011年で比較したものである。2006年は「あてはまる」「ややあてはまる」の合計で69.7％、2011年では、同75.5％で、5.8ポイントの増加である。母親の目からみても、子どもと父親は楽しい時間を持てていると評価している割合が７割を超えている。

図３－１－７　○○ちゃんと遊ぶ（2011年　職場環境別）

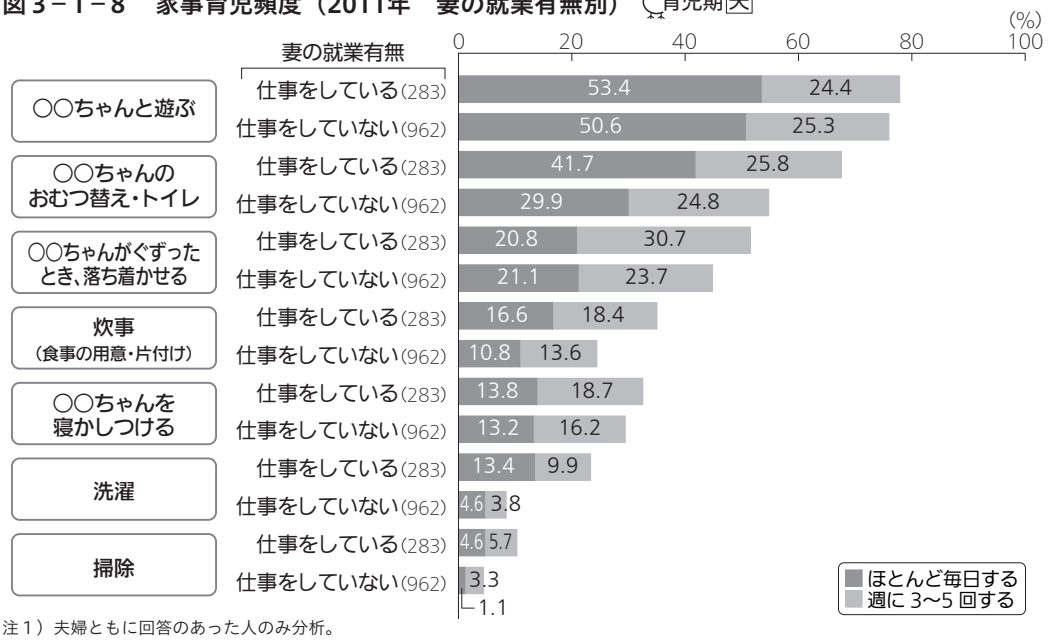
育児期 夫



注１）職場環境についての質問６項目中、３項目について「まったくその通り」「まあその通り」と回答した人を「ある」、「あまりその通りではない」「まったくその通りではない」と回答した人を「ない」として分析。
注２）（　　）内はサンプル数。

図３－１－８　家事育児頻度（2011年　妻の就業有無別）

育児期 夫



注１）夫婦ともに回答のあった人のみ分析。
注２）現在の就業形態をたずねた設問で、「正社員」「派遣・契約社員・嘱託」「パートタイム・アルバイト」「自営業・家族従業」「内職・在宅ワーク」「その他」と回答し、休職中ではないと回答した人を「仕事をしている」とし、「無職（専業主婦を含む）」と回答した人及び「休職中」と回答した人を「仕事をしていない」とした。
注３）（　　）内はサンプル数。

図３－１－９　子育てに自信が持てるようになった（2011年　育児頻度別）

育児期 夫

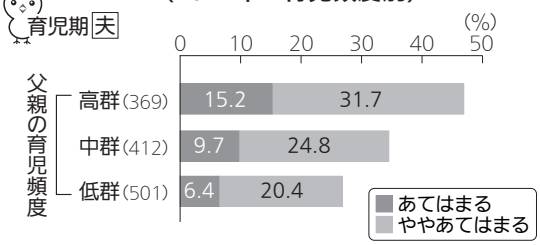
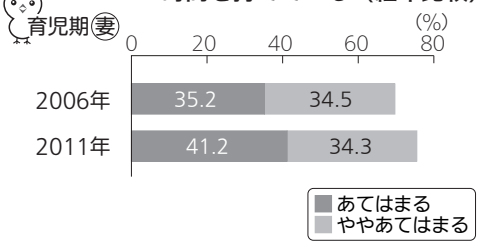


図３－１－10　○○ちゃんは父親と過ごす楽しい時間を持てている（経年比較）

育児期 妻



注１）父親の育児頻度は、「育児頻度」の質問４項目を得点化し、３区分した。１項目でも無答不明の人は除く。
注２）（　　）内はサンプル数。

第2節

配偶者との関係

妊娠期から2歳児期の配偶者との関係でもっとも数値が減少するのは「配偶者といると本当に愛していると実感する」である。夫が育児にかかわっているという認識のある妻は、子育ての肯定感が高い傾向にある。

妻（妊娠期から2歳児期）の配偶者との関係

ここでは、妊娠期、育児期における夫婦の関係についてみていきたい。妊娠から出産を経て育児期の配偶者との関係はどのように変化するのだろうか。

表3－2－1は、配偶者に関する項目の2006年と2011年との比較である12項目のうち、5項目を図示しているが、12項目すべてでほとんど変化はみられなかった。2006年、2011年のいずれも「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」で「あてはまる」と回答した人は約半数、「私と配偶者は、子育てや家事などの分担に関してお互いに助け合っている」人は約3分の1であった。妊娠期もこの5年間での変化はみられなかった（図表省略）。

2011年の結果を子どもの年齢別にみたものが**図3－2－1**である。すべての項目で「あてはまる」と回答したのは、妊娠期がもっとも高く、0歳児期、1歳児期、2歳児期と徐々に割合が減少する。

妊娠期から2歳児期にかけてもっとも多く減少しているのは「配偶者といると本当に愛していると実感する」（妊娠期66.2％、2歳児期24.6％で41.6ポイントの差）、ついで「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」（妊娠期73.1％、2歳児期42.9％で30.2ポイントの差）である。結婚生活に対する幸せの度合い・配偶者への愛情のいずれも、妊娠期では6～7割と高いが、0歳児期で4～5割と大きく減少するのが特徴である。

子どもをどう育てるかの話し合いや家事・育児などの分担、助け合いについては、妊娠期で4割前後が「あてはまる」と回答しているが、2歳児期では26～27％程度に減少する。子どもが生まれた後、具体的な話し合いや助け合いが必要になるだろうと思われるが、実際はそのような機会を増やすことが難しい様子がうかがえる。

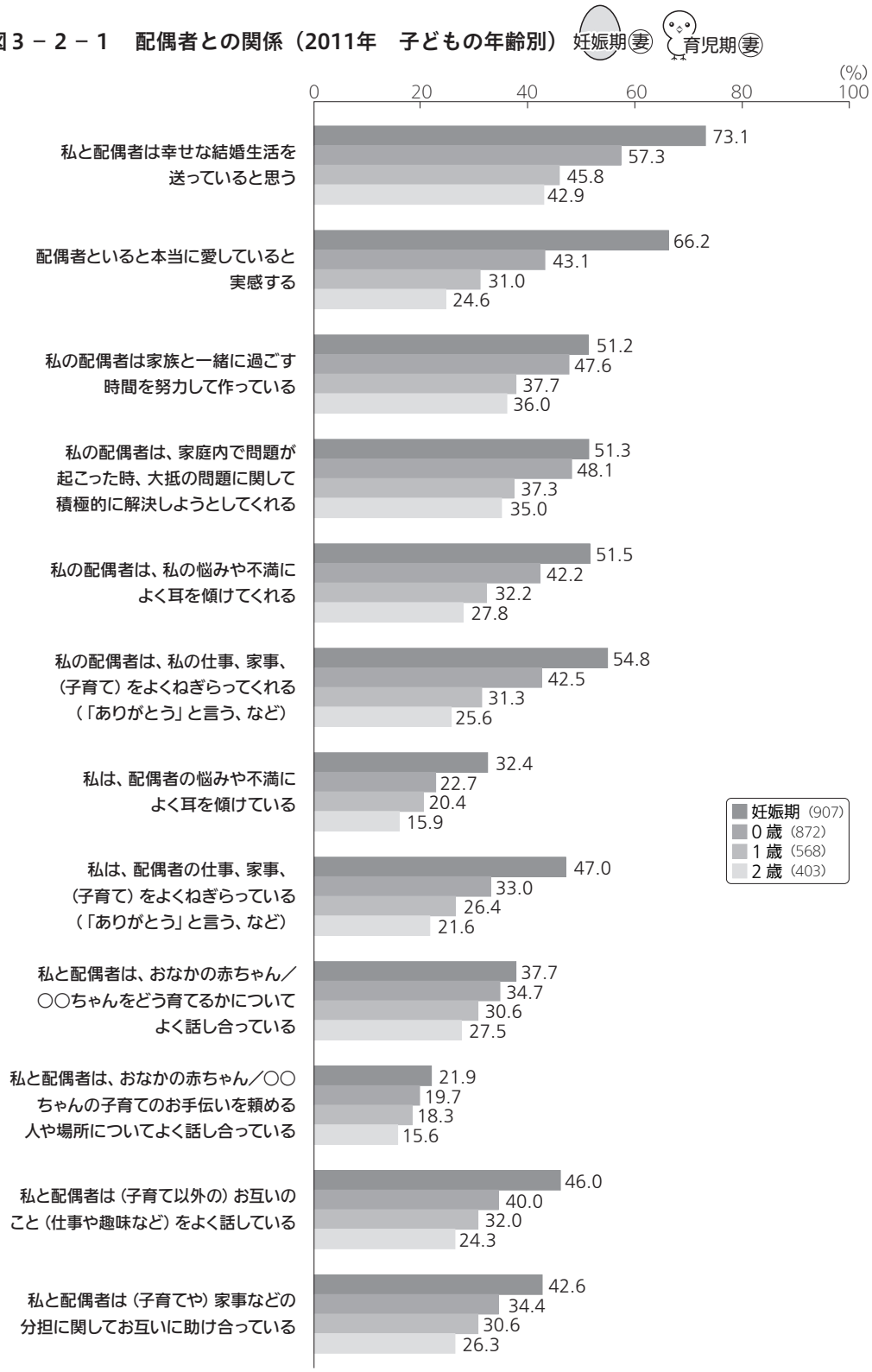
表3－2－1　配偶者との関係（経年比較） 育児期妻

(%)

	2006年	2011年
私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う	52.0	50.6
配偶者といると本当に愛していると実感する	34.1	35.3
私の配偶者は家族と一緒に過ごす時間を努力して作っている	45.0	42.0
私の配偶者は、私の仕事、家事、子育てをよくねぎらってくれる（「ありがとう」と言う、など）	33.0	35.4
私と配偶者は、子育てや家事などの分担に関してお互いに助け合っている	32.2	31.5

注1）「あてはまる」の％。
注2）12項目中、5項目を図示。

図３－２－１　配偶者との関係（2011年　子どもの年齢別）



注１）「あてはまる」の％。
注２）（　　）内はサンプル数。

夫（妊娠期から２歳児期）の配偶者との関係

次に、妊娠期から育児期にかけての夫の変化をみてみよう。**表３－２－２**は、配偶者に関する項目の2006年と2011年との比較である（育児期夫、12項目のうち、５項目を図示）。妻と同様に、12項目すべてでほぼ変化はみられなかった。2006年と2011年のいずれも「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」で「あてはまる」と回答した人は約６割、家事・育児を分担している人は約３分の１であった。妊娠期も５年間での変化はみられない（図表省略）。

2011年の結果を子どもの年齢別にみたものが**図３－２－２**である。ほとんどの項目で、妻と同様に「あてはまる」の割合は妊娠期がもっとも高く、０歳児期、１歳児期、２歳児期と徐々に割合が減少しているが、夫の場合は、総じて妻の数値よりも高い。

妊娠期から２歳児期にかけてもっとも多く減少しているのは「配偶者といると本当に愛していると実感する」（妊娠期74.1％、２歳児期43.7％で30.4ポイントの差）、ついで「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」（妊娠期77.2％、２歳児期49.3％で27.9ポイントの差）である。どちらの項目も２歳時点での妻に対する評価は、約４～５割であり、妻の夫に対する評価よりも高くなっている。

一方、子どもをどう育てるかの話し合いや家事・育児などの分担、助け合いについては、妻とほぼ同様の傾向である。妻に対してのねぎらいや悩み・不満に耳を傾けているかなどの自己評価は低く、「私は配偶者の悩みや不満によく耳を傾けている」では妊娠期37.7％、２歳児期19.0％で18.7ポイントの減少である。

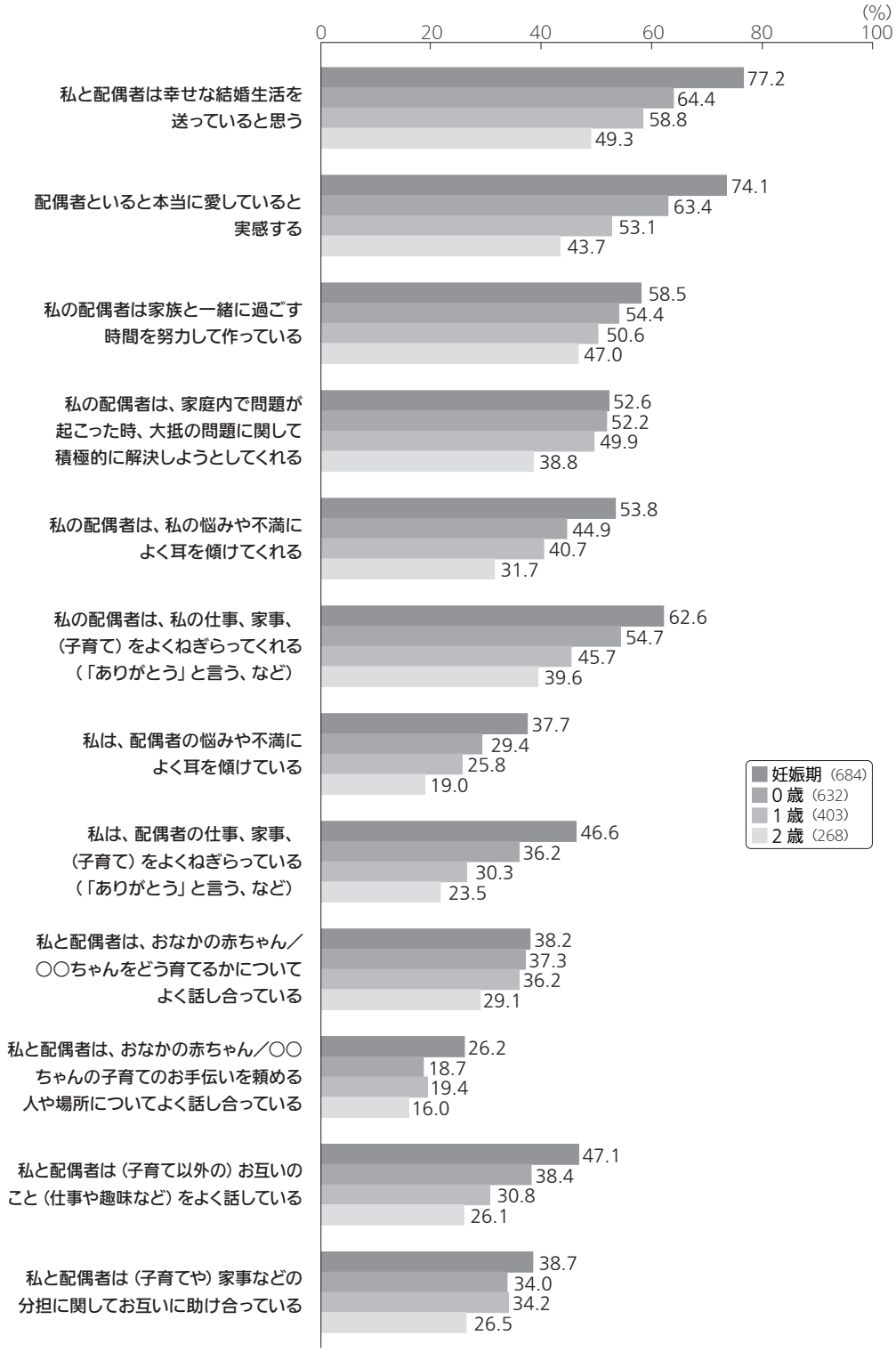
表３－２－２　配偶者との関係（経年比較） 育児期 夫

(%)

	2006年	2011年
私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う	60.0	59.6
配偶者といると本当に愛していると実感する	54.9	56.2
私の配偶者は家族と一緒に過ごす時間を努力して作っている	52.9	51.7
私の配偶者は、私の仕事、家事、子育てをよくねぎらってくれる（「ありがとう」と言う、など）	47.3	48.8
私と配偶者は、子育てや家事などの分担に関してお互いに助け合っている	29.9	32.5

注１）「あてはまる」の％。
注２）12項目中、５項目を図示。

図３－２－２　配偶者との関係（2011年　子どもの年齢別）妊娠期夫　育児期夫



注１）「あてはまる」の％。
注２）（　　）内はサンプル数。

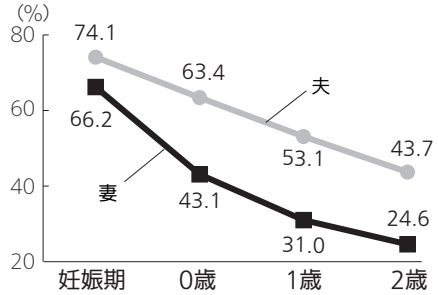
妻と夫の違い

妻と夫では、回答にどのような差がみられるのだろうか。**図３－２－３**は「配偶者といると本当に愛していると実感する」について、妊娠期から２歳児期までの妻・夫の変化をみたものである。妻・夫ともに、子どもの年齢が上がるほど、「あてはまる」の割合が低下していく。妊娠期では、妻66.2％、夫74.1％であるが、妻・夫ともに徐々に数値が下がり、子どもが２歳になると、妻24.6％、夫43.7％となる。夫よりも妻のほうが減少する幅が大きい。「私の配偶者は、私の仕事、家事、(子育て）をよくねぎらってくれる」（**図３－２－４**）では、妊娠期で「あてはまる」は妻54.8％、夫62.6％であるが、子どもが２歳になると妻25.6％、夫39.6％となる。妻の回答は夫よりも総じて低く、夫ほどには配偶者に対して自分をよくねぎらってくれる存在であると認識していないようである。

夫からのねぎらいが多い群と少ない群に分けて、夫への愛情との関係をみたものが**図３－２－５**である（育児期妻)。夫のねぎらいが少ない群では、「配偶者といると本当に愛していると実感する」割合（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）は36.1％であるのに対して、夫のねぎらいが多い群では、84.8％であった。また、家事・育児などの助け合いが多い群と少ない群でみたところ（**図３－２－６**)、助け合いが少ない群では、「配偶者といると本当に愛していると実感する」割合(「あてはまる」＋「ややあてはまる」）は、43.0％であるのに対して、多い群では、81.8％であった。相手の家事・育児をねぎらったり、お互いに家事や育児を助け合うことは、配偶者に対する愛情の高さと関係があることがうかがえる。

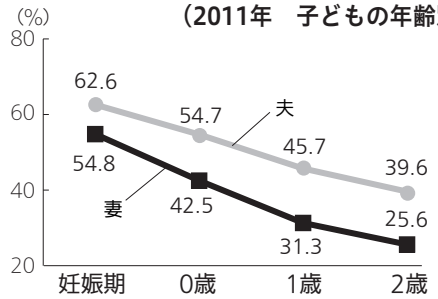
図３－２－７は、夫の育児へのかかわりと妻の子育て観との関連をみたものである。「○○ちゃんは父親と過ごす楽しい時間を持てている」について父親との楽しい時間を子どもが持てていると評価している群と持てていないと評価している群に分けて妻の子育て肯定感・否定感との関連をみてみよう。持てている群では、持てていない群に比べて母親の子育て肯定感の数値が高い傾向がみられた。「子育てが楽しいと心から思う」については、持てている群77.8％、持てていない群65.5％で12.3ポイントの差であった。一方、「子どもがうまく育っているか不安になる」では、持てている群46.3％、持てていない群59.1％で、持てている群のほうが不安が低かった。夫が育児にかかわっているという妻の認識は、妻自身の子育て観にも関係しているようである。

図３－２－３　配偶者といると本当に愛していると実感する（2011年　子どもの年齢別）



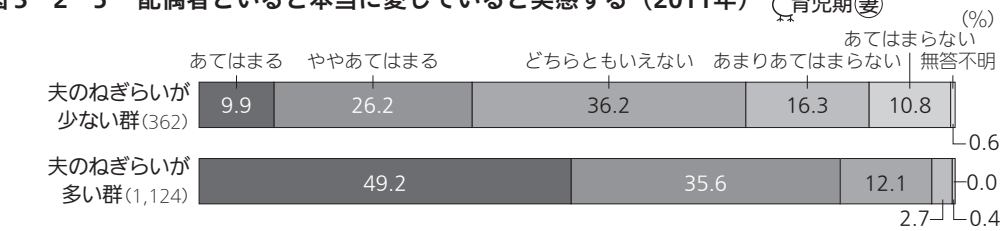
注）「あてはまる」の%

図３－２－４　私の配偶者は私の仕事、家事、（子育て）をよくねぎらってくれる（2011年　子どもの年齢別）



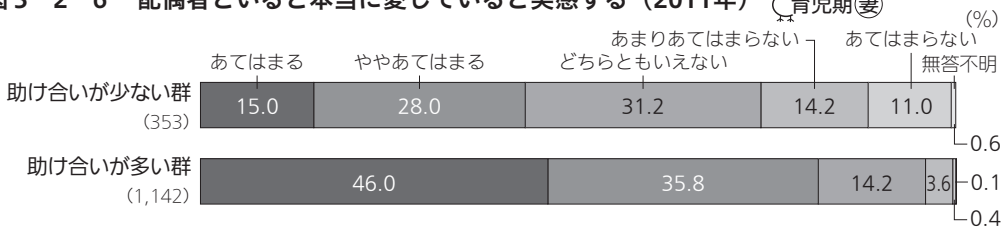
注）「あてはまる」の%

図３－２－５　配偶者といると本当に愛していると実感する（2011年） 育児期(妻)



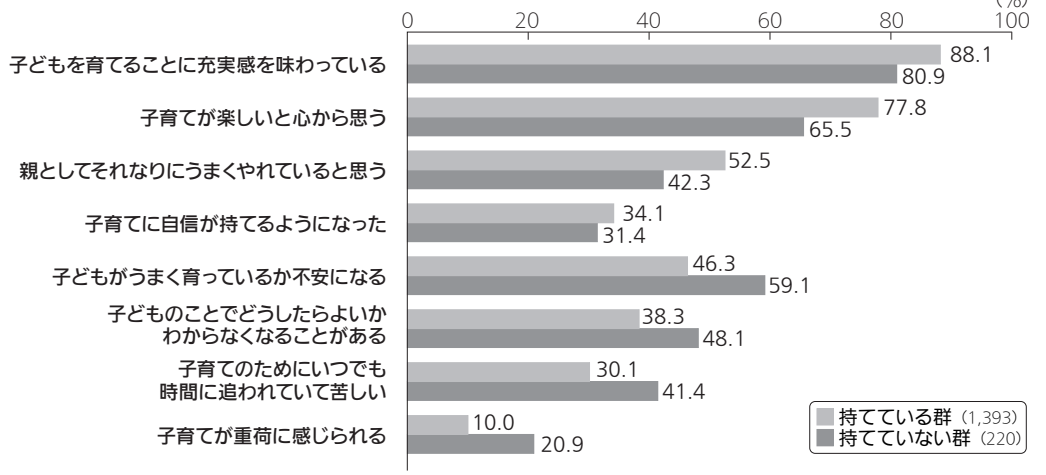
注１）「私の配偶者は、私の仕事、家事、子育てをよくねぎらってくれる」で「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した人を「夫のねぎらいが多い群」、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した人を「夫のねぎらいが少ない群」とした。
注２）（　　）内はサンプル数。

図３－２－６　配偶者といると本当に愛していると実感する（2011年） 育児期(妻)



注１）「私と配偶者は、子育てや家事などの分担に関してお互いに助け合っている」で「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した人を「助け合いが多い群」、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した人を「助け合いが少ない群」とした。
注２）（　　）内はサンプル数。

図３－２－７　子育て観（2011年　○○ちゃんは父親と過ごす楽しい時間を持てている） 育児期(妻)



注 1）「あてはまる」＋「ややあてはまる」の%。
注 2）「○○ちゃんは父親と過ごす楽しい時間を持てている」で「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した人を「持てている群」、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した人を「持てていない群」とした。
注３）（　　）内はサンプル数。

第3節

祖父母世代との関係

祖父母のかかわりでは、妻の母親（子どもの祖母）を妻が頼りにしている割合が高く、「子育ての相談にのってもらう」「子どもを預かってもらう」などが主な手伝い内容である。

第3節では、子どもの祖父母の家事・育児へのかかわりについてみてみよう。この節は育児期妻の回答を取り上げている。

図3－3－1は、子どもの祖父母と自宅の距離を聞いたものである。住居の距離は、自身の両親、夫の両親ともに、約半数が同居もしくは近居（「同居、二世帯住宅、同じ敷地内」＋「徒歩圏内」＋「電車、バス、車を使って30分未満」＋「電車、バス、車を使って30分～1時間未満」）の距離に住んでいる。遠距離（「電車、バス、車を使って1時間以上」＋「飛行機を利用する距離」）は、自身の両親、夫の両親ともに約3割である。同居と近居について、居住地の人口規模別でみると、5万人未満の地域では、妻・夫の両親との同居・近居が他地域に比較して多い（約6割）。一方、特別区・指定都市（東京23区および2011年11月現在の政令指定都市19市）では、自身の両親、夫の両親ともに同居・近居率はもっとも低く、人口規模の大きい地域では、約半数の世帯が、両親が遠距離に住んでいる状況である。

子どもの祖父母と会う頻度

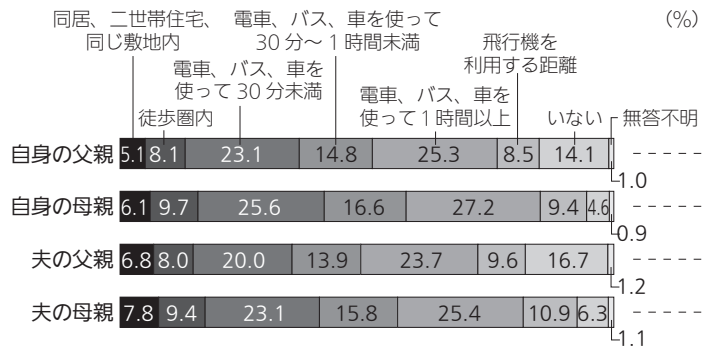
自身の両親、または夫の両親と会う頻度を聞いた結果が**図3－3－2**である。もっとも会う頻度が多いのは、自身の母親で「ほぼ毎日」「ほぼ毎週」を合わせて48.5％と約5割である。ついで自身の父親35.7％（「ほぼ毎日」「ほぼ毎週」の合計、以下同）、夫の母親28.7％、夫の父親23.9％であり、高い頻度で自身の母親と会っている様子がうかがえた。

会わない比率（「ほとんど会わない」「まったく会わない」の合計）では、夫の父親18.0％、夫の母親18.0％、自身の父親11.5％、自身の母親10.5％であった。

子育ての頼りになるか

図3－3－3は、子育てをするうえで、子どもの祖父母がどのくらい頼りになるかをたずねた結果である。これをみると、妻がもっとも頼りにしているのは自身の母親で、55.8％が「とても頼りになる」と答えており、「やや頼りになる」と合計すると80.9％という高い割合を示している。夫の母親に対しても53.3％の妻が肯定的に回答しており（「とても頼りになる」＋「やや頼りになる」）、子育てでは、両祖母の存在は頼りになっていることがうかがえる。一方、祖父に対しては少し傾向が異なり、自身の父親に対しては、49.9％が「頼りになる」（うち、「とても頼りになる」は22.0％）と肯定的な見方をしている一方で、夫の父親では肯定的な見方は31.9％で（うち、「とても頼りになる」は11.4％）、13.9％は夫の父親は「まったく頼りにならない」と感じている。

図３－３－１　子どもの祖父母と自宅の距離（2011年　全体値・居住地人口規模別）育児期妻



同居・近居率（居住地人口規模別）

	特別区・指定都市 (560)	15万人以上 (566)	5万～15万人未満 (398)	5万人未満 (176)
自身の父親	43.6	52.8	52.3	61.9
自身の母親	50.4	60.2	59.3	65.3
夫の父親	40.4	49.6	56.8	59.1
夫の母親	48.0	56.4	63.3	68.8

注１）（　　）内はサンプル数。
注２）同居・近居率は、「同居、二世帯住宅、同じ敷地内」「徒歩圏内」「電車、バス、車を使って30分未満」「電車、バス、車を使って30分～１時間未満」の％
注３）「特別区・指定都市」…特別区（東京23区）および2011年11月現在の政令指定都市19市。「15万人以上」…特別区・指定都市を除いた人口15万人以上の市町村。「5万～15万人未満」…人口5万人以上15万人未満の市町村。「5万人未満」…人口5万人未満の市町村（総務省統計局編『統計でみる市区町村のすがた2012』より）。

図３－３－２　子どもの祖父母と会う頻度（2011年）育児期妻

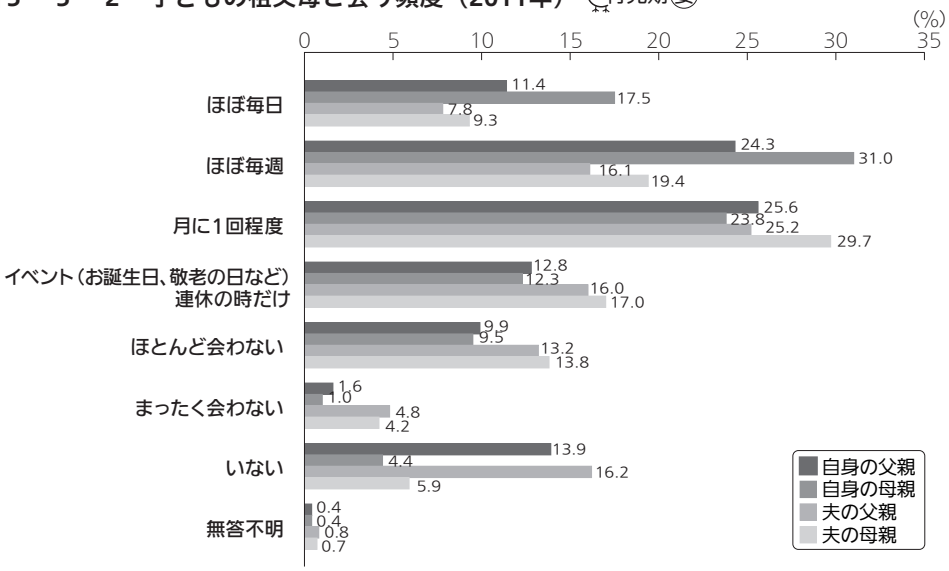
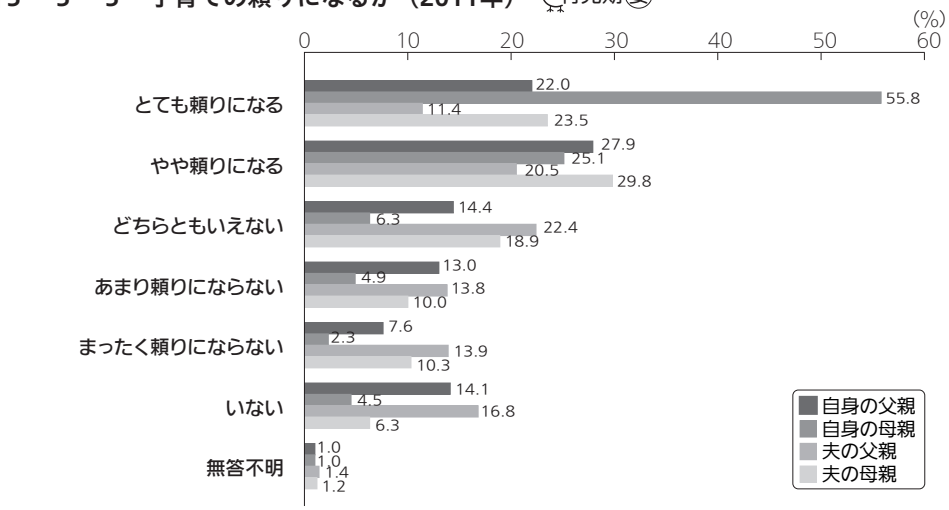


図３－３－３　子育ての頼りになるか（2011年）育児期妻



子育ての頼りにするのは近くに住む親

子育てをするうえで、子どもの祖父母との住居の距離はどの程度影響するのだろうか。**図３－３－４**は、自身の母親と夫の母親について、住居の距離（距離30分未満群、距離30分以上群）により、頼りにしている割合がどの程度かをみたものである。もっとも子育てで母親を頼りにしているのは、自身の母親との距離が30分未満の群であった。自身の母親では、「距離30分未満」93.1％（「とても頼りになる」＋「やや頼りになる」以下同）＞「距離30分以上」79.2％であり、非常に頼りにしている比率が高い。夫の母親の場合でも、数値は低いが、30分未満の距離に住んでいる群のほうがより頼りにしている傾向が示された（「距離30分未満」68.8％＞「距離30分以上」48.5％）。

子どもの祖父母からの支援

図３－３－５は、子どもの祖父母世代から、子育てや家事でどんな支援を受けているかについてたずねた結果である（各項目について複数回答）。まず、「子どもを預かってもらう」のは自身の母親が54.0％ともっとも多く、ついで自身の父親29.7％、夫の母親27.2％、夫の父親15.2％の順になっている。一方、「子育ての相談にのってもらう」は、自身の母親67.6％、夫の母親33.5％と女親を頼りにしている様子が示されている。同様に、「家事を手伝ってもらう」「子どもが病気の時に預かってもらう」についても、双方の母親により助けてもらっていることがわかる。

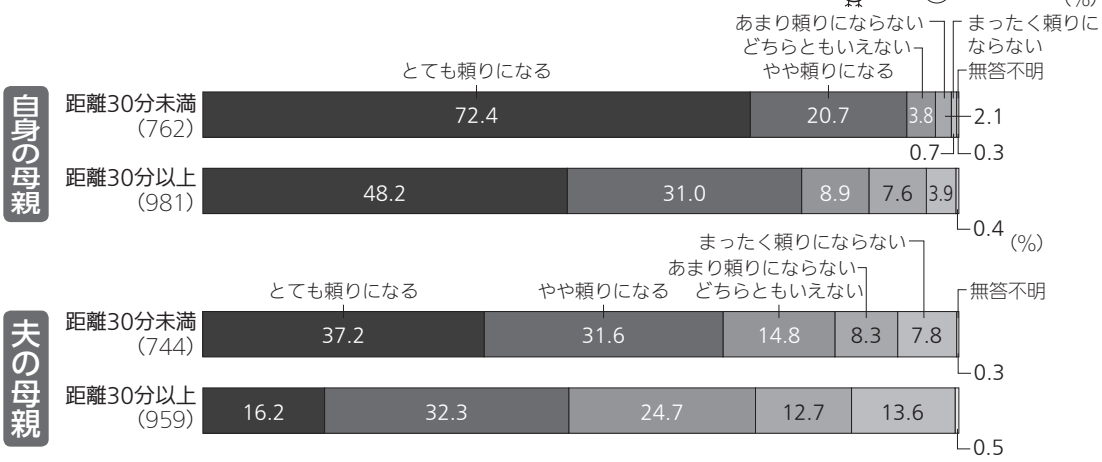
「経済的に支援してもらう」は、自身の父親27.5％、自身の母親26.5％、夫の母親20.8％、夫の父親19.4％の順で、自身の父親、母親の支援が夫の父親、母親よりも高かった。「第２回乳幼児の父親についての調査」（2009年、ベネッセ次世代育成研究所）では、経済的な祖父母の支援について乳幼児の父親に聞いているが、父親自身の実家（主に父親）をもっとも頼りにしている傾向が示された。今回の調査の妻の回答と傾向が異なっており、それぞれ自身の実家を頼りにしている点は興味深い。

妻の年代による支援の違い

祖父母世代からの具体的な支援内容について、年代による特徴はあるのだろうか。**図３－３－６**では、とくに妻の母親を取り上げて、妻の年代別の比較を行った。まず、「子育ての相談にのってもらう」はもっとも頼りにしている比率が高い項目だが、「25～29歳」74.6％、「35歳以上」60.9％で、若い年代の母親ほど、自身の母親に子育ての相談をしている様子が示された。「子どもを預かってもらう」「家事を手伝ってもらう」「経済的に支援してもらう」でも同様の傾向がみられた。

図３－３－４　子育ての頼りになるか（2011年　祖母との居住距離別）

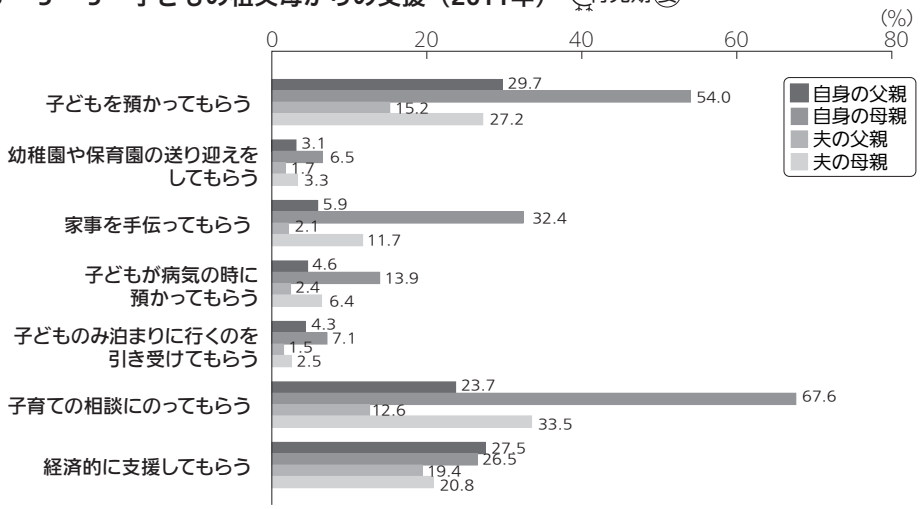
育児期妻



注１）「距離 30 分未満」＝「同居、二世帯住宅、同じ敷地内」「徒歩圏内」「電車、バス、車を使って 30 分未満」、「距離 30 分以上」＝「電車、バス、車を使って 30 分～１時間未満」「電車、バス、車を使って１時間以上」「飛行機を利用する距離」。
注２）それぞれ「いない」と回答した人は除いて分析。
注３）（　　）内はサンプル数。

図３－３－５　子どもの祖父母からの支援（2011年）

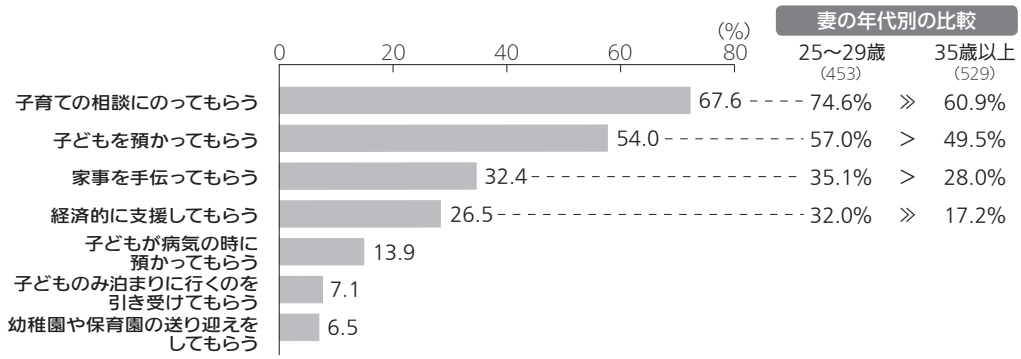
育児期妻



注１）複数回答。
注２）それぞれ「いない」と回答した人は除いて分析。

図３－３－６　自身の母親からの支援（2011年　全体・妻の年代別）

育児期妻



注１）複数回答。
注２）「いない」と回答した人は除いて分析。
注３）妻の年代別は、25 ～ 29 歳、35 歳以上のみ分析。
注４）< > は５ポイント以上、≪ ≫は 10 ポイント以上差があるもの。
注５）（　　）内はサンプル数。

妻が就業している世帯と就業していない世帯では祖母からの支援が異なる

妻の就業状況によって、祖父母世代からの支援に違いはあるのだろうか。ここでは、妻が仕事をしている群と、妻が仕事をしていない群で自身と夫の母親からの支援の比較を行った（**図３－３－７～８**）。その結果、「子どもを預かってもらう」「家事を手伝ってもらう」では妻の就業状況による差はみられなかった。それに対して、「幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう」「子どもが病気の時に預かってもらう」などの項目において違いがみられた。

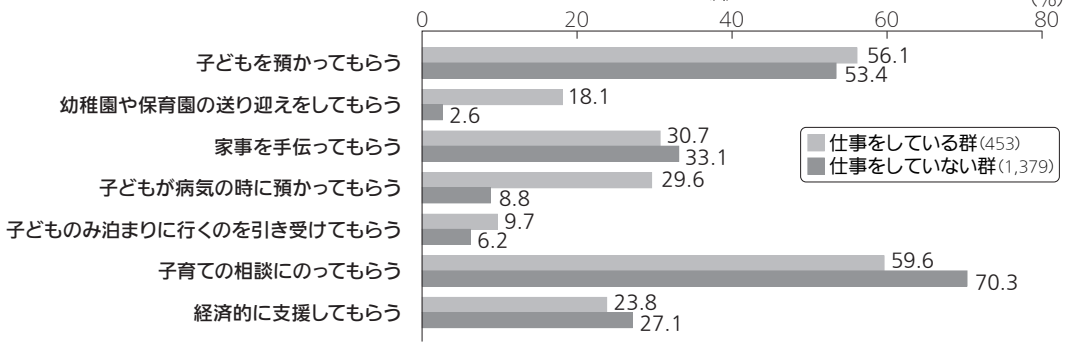
まず、「子どもが病気の時に預かってもらう」について、仕事をしている群は祖母に支援を依頼することが多く、自身の母親に加え夫の母親も頼りにしていることが示された（自身の母親：仕事をしている群 29.6％＞仕事をしていない群 8.8％、夫の母親：仕事をしている群 14.3％＞仕事をしていない群 3.8％）。また、「幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう」でも、同様の傾向がみられる（自身の母親：仕事をしている群 18.1％＞仕事をしていない群 2.6％、夫の母親：仕事をしている群 9.1％＞仕事をしていない群 1.4％）。仕事と子育てを両立させるための物理的な支援を受けている様子がうかがえる。

このように、妻が仕事をしている世帯では、祖母に物理的な支援を頼むことが多い一方で、「子育ての相談にのってもらう」「経済的に支援してもらう」については、仕事をしていない群のほうが、祖母に支援してもらう機会が多いようだ。「子育ての相談にのってもらう」では、自身の母親からの支援の比率が高い（自身の母親：仕事をしていない群 70.3％＞仕事をしている群 59.6％、夫の母親：仕事をしていない群 36.0％＞仕事をしている群 26.0％）。「経済的に支援してもらう」でも、同様の傾向がみられた（自身の母親：仕事をしていない群 27.1％＞仕事をしている群 23.8％、夫の母親：仕事をしていない群 22.3％＞仕事をしている群 15.9％）。

祖父母と同居の世帯では夫の育児頻度はやや低い

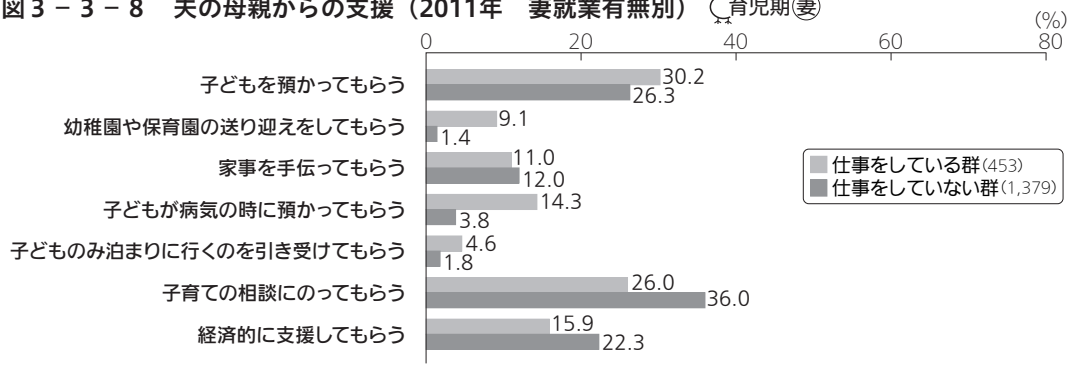
祖母の住む距離によって、父親の育児・家事に違いはあるのだろうか。**図３－３－９**では、育児期夫について、妻の母親が同居、近居、遠距離の場合で夫の家事・育児の比較を行った。「○○ちゃんと遊ぶ」「○○ちゃんがぐずったとき、落ち着かせる」の項目において違いがみられた。「○○ちゃんと遊ぶ」では、妻の母親が同居している場合は夫の子どもへのかかわりは少なくなることが示された（「ほとんど毎日する」同居 39.1％＞近居 51.4％＞遠距離 51.3％）。「○○ちゃんがぐずったとき、落ち着かせる」でも同様の傾向がみられる。

図３－３－７　自身の母親からの支援（2011年　妻就業有無別）育児期妻



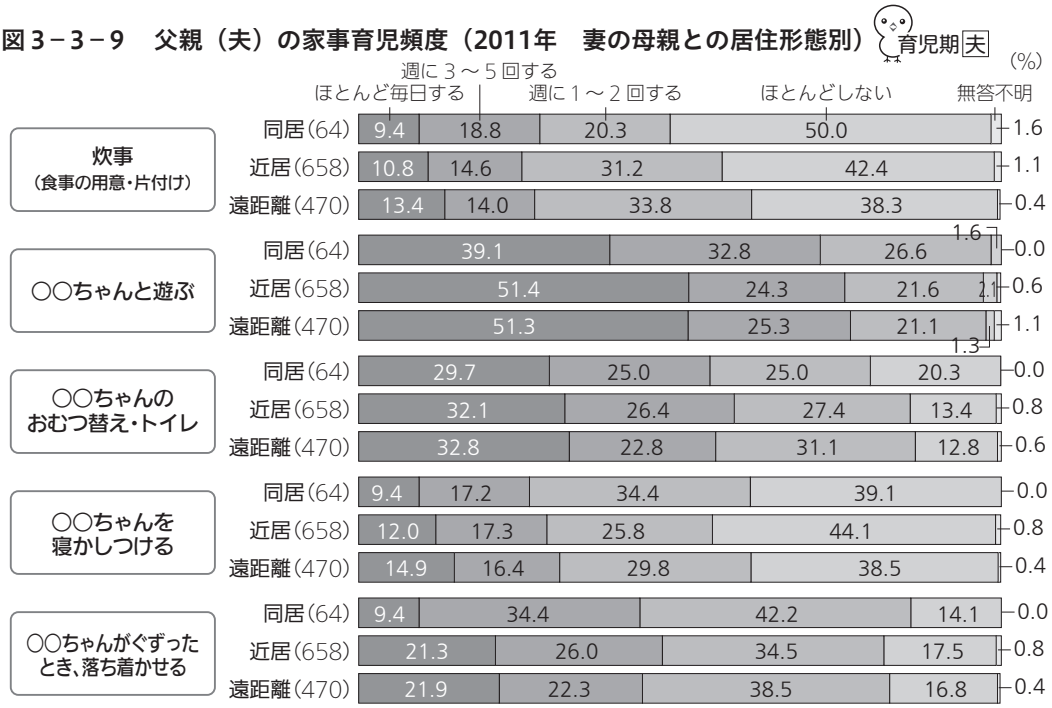
注１）複数回答。　注２）妻の「仕事をしている群」と「仕事をしていない群」については P57 図３－１－８の注２）参照。
注３）「いない」と回答した人は除いて分析。　注４）（　　）内はサンプル数。

図３－３－８　夫の母親からの支援（2011年　妻就業有無別）育児期妻



注１）複数回答。　注２）妻の「仕事をしている群」と「仕事をしていない群」については P57 図３－１－８の注２）参照。
注３）「いない」と回答した人は除いて分析。　注４）（　　）内はサンプル数。

図３－３－９　父親（夫）の家事育児頻度（2011年　妻の母親との居住形態別）育児期夫



注１）夫婦ともに回答のあった人のみ分析。妻の母親の居住形態は、妻の回答を使用。
注２）「同居」＝「同居、二世帯住宅、同じ敷地内」、「近居」＝「徒歩圏内」＋「電車、バス、車を使って 30 分未満」＋「電車、バス、車を使って 30 分～１時間未満」、「遠距離」＝「電車、バス、車を使って１時間以上」＋「飛行機を利用する距離」。
注３）７項目中、５項目を図示。
注４）（　　）内はサンプル数。